

日本三大山城に生育する薬用植物テンナンショウ

種坂英次¹⁾・新谷和之²⁾

¹⁾ 近畿大学農学部農業生産科学科, ²⁾ 近畿大学文芸学部文化・歴史学科

Medicinal plants in the genus *Arisaema* growing in Japan's three major mountain castles

Eiji Tanesaka¹⁾ and Kazuyuki Shinya²⁾

¹⁾ Department of Agricultural Production, Faculty of Agriculture, Kindai University

²⁾ Department of Culture and History, Faculty of Literature, Kindai University

Synopsis

We investigated the current growth of the medicinal plant in the genus *Arisaema* in Japan's three major mountain castles (Bicchu Matsuyamajo, Yamato Takatorijo, and Mino Iwamurajo). We observed that *Arisaema* plants grow in all castle ruins, with *A. nambae* Kitam. at Matsuyamajo, *A. yamatense* (Nakai) Nakai at Takatorijo, and *A. sugimotoi* Nakai at Iwamurajo. These castles were established in the Middle Ages, and after undergoing large renovations, continued to function into the early modern period, so they can be considered in the context of continuity between the medieval and the early modern period. We also listed the presence or absence of *Arisaema* in medicinal herb gardens operated by samurai, the shogunate, and various feudal domains in the Edo period, and considered the use of *Arisaema* from the medieval to the early modern period.

Keywords: *Arisaema*, medicinal plants, medieval and early modern castles, war injury

1. 緒言

テンナンショウ属植物(天南星, *Arisaema* spp.)はサトイモ科の多年草で, 湿潤な熱帯から温帯に分布し, 世界に約 180 種, 日本に 50 種以上が知られている¹⁾. アジアでは古くから地下部(塊茎)を薬用とし²⁾, 特に我が国中世には金創(おもに戦傷)治療における破傷風予防に用いられた^{3), 4), 5), 6)}.

本植物は近畿地方に散在する中世城郭遺構でしばしば観察され, 奈良県北西部(平群町周辺)の里山環境では, 城郭遺構に集中的に分布している。和歌山県の城郭遺構では宗教勢力を含む各勢力の拠点城を中心に見られ⁸⁾, 一方、奈良県では大和国人衆らが支配した城郭遺構に見られるものの, 興福寺衆徒である筒井氏勢力の複数遺構には見られない⁹⁾など, 自然

日本三大山城に生育する薬用植物テンナンショウ種坂

環境のみでは説明しきれない分布を示している。これらのことから、本植物の現在の分布が薬用を目的とした中世における人為的な植栽や保護を反映した残存植物（ruminant plants）ではないかと指摘されている⁷⁾。本植物の根部にはサポニンとともに多量のシュウ酸カルシウムを含むため、イノシシなどの野生動物に消費されることは無い。よって、多量のアルカロイドを含む毒草のヒガンバナのように数世紀以前の植栽地を反映する可能性がある。

しかしながら、軍事集団における薬用植物の栽培を示す一次史料は近世以降でないと見当たらず、本植物の中世城郭遺構における集中分布の要因について、薬用や茶花としての利用を目的とした人為的行為を反映するものなのか、たんに生育に適した現在の自然環境を反映するものなのか、または近年の文化財保全における除草圧による攪乱の影響なのかについては明らかではない。

本研究では、俗に「日本三大山城」と呼ばれる備中松山城（岡山県高梁市）、大和高取城（奈良県高市郡高取町）、および美濃岩村城（岐阜県恵那市）における本植物の分布を調べた。これらの城は中世に成立した後、大きな改修を受けつつ近世に至ってからも機能し、歴史の連続性の中で考察できる。中世における採薬の記録とともに、江戸時代に幕府や諸藩によって運営された薬園におけるテンナンショウ栽培の記録を含めて、中世から近世における本植物の利用について考察する。

2. 調査

2019年から2024年の花期（4月から5月）に備中松山城、高取城、岩村城にてテンナンショウ属植物を採取し、『日本産テンナンショウ属図鑑』¹⁾に従って同定した。これらの腊葉標本は近畿大学農学部育種学研究室に保管されている。

3. 結果

調査した3つの城郭遺構の全てでテンナンショウ属植物を観察し（図1）、いずれの縄張



図1 日本三大山城に生育するテンナンショウ属植物

Fig. 1 *Arisaema* plants growing in ruins of Japan's three major mountain castles.

(a) *A. nambae*, Matsuyamajo; (b) *A. yamatense*, Takatorijo; (c) *A. sugimotoi*, Iwamurajo.

り内でも百株以上の生育があった。

松山城ではタカハシテンナンショウ (*A. nambae* Kitam.) の生育を観察した。本種は広島県と岡山県に分布し、4月初旬に地上に葉と花序を出し、花序は葉よりも先に展開する。本

種は 1952 年に備中松山城（臥牛山）の大手門や三の丸で採集された標本が新種として記載された¹⁰⁾という経緯がある。本城には紫色の縦縞模様の仏炎苞を持つ株が多かったが、縄張り内の相畑城戸跡周辺には緑色の仏炎苞をもつ株も生育していた。高取城ではムロウテンナンショウ (*A. yamatense* (Nakai) Nakai) の生育を観察した。本種は紀伊山地を中心に近畿地方に広く分布する。花期は 4 月下旬から 5 月、花序付属体の先端は光沢のある濃緑色の円頭形となる。本種は植村氏 (1640 年から明治維新までの城主) の菩提寺である宗泉寺、松の門から本丸の周辺、および壺坂口の屋敷跡のそれぞれに数十株が集中分布していた。岩村城ではスルガテンナンショウ (*A. sugimotoi* Nakai) の生育を観察した。本種は中部東海地方に分布する。4 月頃に地上に葉と花序を出し、葉と仏炎苞は同時に展開する。花序付属体の先端は白く光沢のないダイズほどの球状に膨れる。岩村城近くにある明智遠山氏の明智城（恵那市明智町）においても本種の生育を観察した。

ここで、城によって生育するテンナンショウ属の種 (species) は異なる。この当時、リンネの系統的な種概念 (1758) が我が国に伝わっていないのは当然として、植物学的な種の検証は貝原益軒の‘大和本草’ (1709)¹¹⁾や小野蘭山の‘本草綱目啓蒙’ (1803)¹²⁾以降の事となる。

4. 考察

奈良時代以降、朝廷内に典薬寮が置かれ、薬園も営まれるが、そこでの主な治療対象は内科・産科であった。軍事行動の運用に関わる外科医療の知見は中世の戦乱期に発展し^{6), 15), 16)}, 14 世紀には戦傷治療に特化した‘金瘡療治鈔’³⁾が著わされ、テンナンショウを用いた処方が頻出する。同じく 14 世紀に僧医の有隣が著した医書‘有林福田方’⁴⁾では破傷風治療において本植物の処方が示されている。しかし、これらの医書の多くは家伝秘伝として扱われ、また医書に接することができた階級も限られていたであろう。

中世に築城の主体となった武士にも、医薬学に通じた者はいた。越前の戦国大名朝倉氏のもとには中央の医師が下向しており、城下町内では医師の屋敷跡が確認されている。朝倉氏ゆかりの金瘡薬として近年話題になった「生蘇散」には、テンナンショウが含まれていたことが近世の史料に書かれている（一乗谷朝倉氏遺跡の諏訪館跡庭園や一乗谷城では 2022 年 5 月の調査においてカントウマムシグサ, *A. serratum* (Thumb.) Schott, の小集団を観察している）。中世の山城では、施設維持の観点から植生が維持され、紀伊の亀山城（御坊市）のように地域住民の山林利益の場となる事例もあった¹⁹⁾。これらを踏まえると、中世の武士たちが城内やその周辺で薬用植物を栽培していた可能性は想定できよう。

ただし、中世後期においても一般の需要に足る組織的な薬種流通はなかったようである。京都の下級公家で臨床医師でもあった山科言継によって 16 世紀半ばに記された‘言継卿記’には、彼が天文十四年 (1532) 4 月 23 日に採薬のために京都吉田山を訪れ、翌 24 日には鴨川原で草採りをしたとの記述がある¹⁷⁾。また、弘治元年 (1555) に貿易商として来日したポルトガル人のルイス・デ・アルメイダは本国で外科手術の免許を取得しており、豊後府中に育児院（病院）を設立し西洋医学を日本に導入したことで知られているが、彼

日本三大山城に生育する薬用植物テンナンショウ種坂

に師事した日本人医師は山中において採薬にも従事していたとの記録がある¹⁸⁾。薬種の栽培・流通の体系化は近世以降とみられる。

江戸幕府や諸藩が運営した薬園では、戦傷治療（外科）に用いる植物も栽培されていた。表1に『日本薬園史の研究』¹³⁾よりテンナンショウ栽培の有無を抜粋して示す。テンナンショウは幕府直轄、諸藩管理の薬園ともに各地で栽培され、薬種として有効性が広く認知されていたことがここからわかる。また、軍馬の治療を対象として寛永年間（1624～1645）に著わされた『馬医書』¹⁴⁾では23の症例についてテンナンショウを用いた処方が示さ

表1. 江戸時代の薬園におけるテンナンショウ栽培の有無*
Table 1. *Arisaema* plants cultivated in medicinal herb gardens established in the Edo period

薬園 garden	開設年 year established	現住所 present address	<i>Arisaema</i>
幕府直轄の薬園 shogunate			
麻布御薬園	1638	東京都港区	—
小石川御薬園	1684	東京都文京区	+
駒場御薬園	1720	東京都目黒区	+
駿府御薬園	1726	静岡市葵区	+
京都御薬園（鷹峰御薬園）	1640	京都市北区鷹峰藤林町	+
長崎御薬園	1680	長崎市館内町他	—
諸藩の薬園 feudal domains			
南部藩	1669	盛岡市愛宕町	+
秋田藩	1820	秋田市千秋矢留町	+
尾張藩（御深井御薬園）	1652	名古屋市中区	—
熊本藩	1756	熊本市薬園町	+
島原藩	1853	長崎県島原市小山町	—
鹿児島藩	1659	鹿児島指宿市山川町	—
その他の薬園 private and others			
浜庭薬園（浜離宮）	1724	東京都中央区	+
内野御預地薬園	?	京都市上京区室町今出川	+
森野薬園	1716	奈良県宇陀市大字陀	+

*: 「日本薬園史の研究」 上田三平（1930）より整理
+, -: 有り, 無し

れている。このように、すでに江戸時代初期には本植物の医薬としての利用は武家集団に広く知られていたことが窺える。

三大山城に自生するテンナンショウがいつから生育していたのか、中世または近世の人為的な植栽や保全の有無については不明である。中世～近世に利用されていた薬種について誰がどこで栽培し、どのように流通していたか（例えば、渡辺祥子氏の『近世大阪 薬種の取引構造と社会集団』²⁰⁾）については今後の課題である。いずれにしても、現在の山城遺構の植生は本属植物の多様性の宝庫と言えるだろう。

5. 要約

日本三大山城（備中松山城、大和高取城、美濃岩村城）における薬用植物テンナンショウの現在の生育状況について調べた。その結果、本植物は全ての城郭遺構に生育し、松山城ではタカハシテンナンショウ (*A. nambae* Kitam.)、高取城ではムロウテンナンショウ (*A. yamatense* (Nakai) Nakai)、および岩村城ではスルガテンナンショウ (*A. sugimotoi* Nakai) を観察した。これらの城は中世に成立した後、大きな改修を受けつつ近世に至ってからも機能し、中世～近世の連続性の中で考察できる。江戸時代に幕府、諸藩の武家集団で運営された薬園におけるテンナンショウ栽培の有無とともに、中世から近世における本植物の利用について考察した。

6. 引用文献

- 1) 邑田仁・大野順一・小林禮樹・東馬哲男. 2018. ‘日本産テンナンショウ属図鑑’ 360 p. 北隆館, 東京
- 2) 江蘇新医学院 (1985) テンナンショウ ‘中薬大辞典 第3巻’ pp. 1866-1868 上海科学技术出版社, 小学館編. 小学館, 東京.
- 3) 著者不詳. 14世紀 ‘金瘡療治鈔’ 明和七年書写. 高知城歴史博物館 山内文庫蔵 <https://kokusho.nijl.ac.jp/biblio/100146757/1?ln=ja>
- 4) 有隣 (14世紀) 卒急諸病 破傷風 ‘有林福田方’ 内閣文庫蔵版 (明暦版: 復刻 1987) 科学書院、霞ヶ関出版. 東京. 875-876.
- 5) 梶原性全 (14世紀) ‘萬安方’ 内閣文庫蔵版 (解題 石原明: 復刻 1986) 科学書院, 東京.
- 6) Goble AD. 2005. War and injury; the emergence of wound medicine in Medieval Japan. *Monumenta Nipponica* 60: 297–338.
- 7) Tanesaka E. 2017. Ethnobotanical survey on distribution of medicinal plants in the genus *Arisaema* in ruins of fortresses used in medieval Japan. *Journal of Medicinal Plants Research* 11: 338–344.
- 8) 種坂英次. 2022. 中世軍事勢力に着目した和歌山県におけるテンナンショウ属植物の分布. *和歌山地方史研究* 84: 2-6.
- 9) 種坂英次. 2023. 奈良県の中世軍事勢力に着目した城郭遺構におけるテンナンショウ属植物の分布. *近畿大学農学部紀要* 84: 2-6.
- 10) 北村四郎・村田源. 1966. 原色日本植物図鑑草本編III (単子葉類) に発表した新名及び新見解. *植物分類地理* 22: 65-74. <https://doi.org/10.18942/bunruichiri.KJ00001077984>
- 11) 貝原益軒. 1709. ‘大和本草’
- 12) 小野蘭山. 1803. ‘本草綱目啓蒙’
- 13) 上田三平. 1972. ‘日本薬園史の研究’ 464p. 渡部書店, 東京

日本三大山城に生育する薬用植物テンナンショウ
種坂

- 14) 著者不詳. 17世紀. '馬医書'. 国会図書館デジタルコレクション
<https://cultural.jp/item/dignl-2544549>
- 15) 新村拓. 2006. '日本医療史' 388p. 吉川弘文館, 東京
- 16) 新村拓. 2013. '日本仏教の医療史' 306p. 法政大学出版会, 東京
- 17) 今谷明. 2002. '戦国時代の貴族「言継卿記」が描く京都' 412p. 講談社, 東京
- 18) 服部敏良. 1971. '室町安土桃山時代医学史の研究' 618p. 吉川弘文館, 東京
- 19) 新谷和之. 中世城郭と植生・薬種. 和歌山地方史研究 84: 7-12.
- 20) 渡辺祥子. 2006. '近世大阪 薬種の取引構造と社会集団' 412p. 清文堂出版, 大阪